2022 年度 商工系資格評価型選抜 小論文問題

以下は『日本語と私』（大野晋著）からの抜粋である。次の文章を読み、問いに答えなさい。

「日本人の読み書き能力」の調査の実態を前回すこし細かく書いた。この調査が行われたことは知られているが、出題の内容、実施の厳格さなどを知っている人はほとんどいない。まして調査の存在すら全く知らない人も多いらしいからである。

この調査を遂行した中心は日本人のローマ字主義者、カナモジ論者たちだった。しかし調査を発想し、推進し、予算を獲得したのは CIE（GHQ 民間情報教育局）である。予算は終戦処理費から取ったというから、今となっては詳しいことは分りそうもない。

国字改革といえば日本人の側では本質的に日本文化の問題として論議していた。しかしその実施は社会政策の一つでもある。CIE は事前の調査を本格的に行った。その結果を見て、日本人の識字率が（おそらく予想以上に）高く、当時の世界としてはむしろ傑出していることを知っただろう。――当時の改革論者は世界と比較せずに七十八点では低いと論じ、一層、言語・文字の平易化を進めるべきだと主張したが――CIE は国字改革からは手を引いてしまった。この進め方と退き方に一つの科学的な姿勢の相違があらわれている。

二十年ばかり前に、南インドのタミル語と日本語とが密接な関係にあることが分って以来、私はヨーロッパ人の研究書に目を通すようになり、それらの学者とも手紙や論文を交換し始めた。日本語については私は学生時代から関心を持ち、研究書も多く見て来た。そこで感じることがある。ヨーロッパの学者の方が私を含めた日本の言語学者、国語学者よりも「事実に対して誠意があり、事実を究明し、記述し、それに基づいて判断を下す強靭さ」を持っている。私は CIE の姿勢にこれと通じるところがあるのを感じる。

もちろん欧米にも偏見をもつ学者はいる。<u>しかし日本人は全体としてどこかで事実をつきつめず、あやふやなままにそっと受け取り、事実よりもそれをめぐる周辺の雰囲気、または人間関係に心を配ろうとする。あるいは進んで、事実をぼやかして扱う方が賢いと思う傾きがある。それは言語の学問にかぎらず、万事に及ぶ。その中にあって「私はこう思う」というだけでも日本ではえらいと評価されることがある。しかし欧米では「こう思う」というのはむしろひとりよがりととられ、その発言を支える事実は何なのか、それを客観的に明らかに述べろという基本の態度がある。</u>

出典：大野　晋『日本語と私』、朝日新聞社、1999 年。出題のため一部改変。

問 1　上の文章を要約しなさい。（300 字以内）

問 2　下線部分について、あなたの考えを述べなさい。（500 字以内）

以　上